

魏連受(魯迅『孤独者』)についての一考察

丸尾勝

一 こどもたちの系譜

革命には敗北がつきものである。革命にまず覚醒し組織的に闘っていくのは知識人である。しかし、民衆が覚醒せず、民衆と遊離した革命はたちまち弾圧され敗北する。そして、変革を目指す知識人は、反動勢力から弾圧され、保守的な社会から余計者扱いされ生活が困窮し、自らの革命思想に疑問を抱き、革命精神を保持していくのが困難になり、転向するものが出てくる。さらに、反対に妨害者、抑圧者になり、革命を推進する知識人と闘うものも出てくる。が、苦闘、苦悶し、道を模索しながら、耐えに耐え、前進しようとするものもいる。このように、知識人たちは、様々な生き方をしていく。

魯迅もまた革命に覚醒し、期待し、また、革命に裏切られ、挫折し、絶望し、孤独に陥っていった知識人である。『《自选集》自序』では、「我的作品在『新青年』上，步调是和大家大概一致的，所以我想，这些确可以算作那时的『革命文学』。然而我那时对于『文学革命』，其实并没有怎样的热情。见过辛亥革命，见过二次革命，见过袁世凯称帝，张勋复辟，看来看去，就看得怀疑起来，于是失望，颓唐得很了。」⁽¹⁾と辛亥革命後の苦々しい過去を振り返っている。また、『《呐喊》自序』でも、「许多年，我便寓在这屋里钞古碑。客中少有人来，古碑中也遇不到什么问题和主义，而我的生命却居然暗暗的消去了，这也就是我惟一的愿望。」⁽²⁾と革命に挫折して、絶望の淵に沈みこんでいる。そして、『《呐喊》自序』にあるように、『新青年』の猛士が寂寞を感じずに猛進できるようにと、また、絶望は絶対には証明はできないと錢玄同から指摘されて、遂に筆を執る⁽³⁾。そして、『狂人日记』を書きあげ、その後次から次へと小説を書き続けて、『呐喊』『彷徨』の諸作品を発表していく。それらの中に『孤独者』という作品がある。

『孤独者』は一九二五年十月十七日に書かれ、第二小説集『彷徨』に

取められている。この作品は『阿Q正伝』に次いで長く、『彷徨』の中では最も長い作品である。この作品の主人公、魏連受もまた、革命に敗北、挫折、絶望し、苦悩していく知識人である。

魏連受は、祖母の葬式の際、祖母の孤独な一生に慟哭する。民衆からは異分子扱いされ、保守的知識人グループから攻撃され、失職し、追い詰められて窮乏する。期待をしていたこどもからも迫害され、自分に生き続けることを期待していた人も謀殺されてしまう。魏連受は、このままでは朽ち果ててしまい、敵の思うとおりになってしまうことを避けるため、軍の幕僚に転身し、自分が尊敬し主張した一切を排斥し、憎み反対した一切のものを実行しようとする。敵側に身を売り、従来意志を捨て、敵のために働くことは、本当の失敗である。が、敵のために屈服せずに生き続けること、敵に気づかれずに敵を欺きとおしたこと、くだらなく愚かな敵の実態を暴露せしめたことにおいて勝利したと言う。しかし、失敗は失敗で、寿命を早めるかのように、生きる資格はない自分の身を抹殺する。祖母の遺体の前で泣き叫んだ時と同じように、手傷を負った狼が深夜の荒野に泣き叫ぶようにして最期を遂げる。

その魏連受の友人の「私」は、魏連受と同じように革命に挫折し、保守的紳士たちに学校騒動を煽動していると攻撃を受け、遂に失職し、再びS市に舞い戻り、変わり果てた魏連受の遺体に再会する。このように、魏連受と「私」の挫折、絶望、苦悩や孤独は、辛亥革命後の魯迅のそれらと重なる。

また、魏連受の進化論の破綻は魯迅の進化論の破綻と重なる。この破綻は『孤独者』の作品に集約されている。魏連受は大人の悪い環境がこどもを悪くしているのであって、もともとこどもは悪くなく、中国唯一の希望はこどもにあると言う。ところが、その魏連受が期待していたこどもから「やっつけろ」と言われる。ここまでは『狂人日記』（一九一八年作）以降の作品の改革者とこどもとの関係において述べられていることである。『狂人日記』は、最後の希望であるこどもを救えと悲痛な声で終わっている。『药』（一九一九年作）では、華老栓・華大媽のこども、小栓が人血饅頭を食べさせられるが死に、『明天』（一九二〇年作）では、単四嫂子の子の宝児が漢方薬を飲ませられるが死ぬ。が、『长明

灯』(一九二五年三月作)では、悪の象徴である常夜灯を消せと訴える改革者に対して、こどもたちまでが大人の悪い習性、迷信に伝染し、大人たちと一緒にやってやっかいもの、笑いもの扱いをする。『野草』の『颓敗线的颤动』(一九二五年六月作)では、売春で得た銭のおかげで成長し結婚した娘の夫婦が、売春という行為について年老いた老婆を執拗に非難し、孫たちまでが非難する。そして、『孤独者』(一九二五年十月作)では、さらに進行する。魏連殳は転向した後、こどもにものを与える時、犬のはえるまねをさせ、頭を床へぶつけさせる。主人と奴隸の関係である。これが、進化論を信じ、後転向した改革者、魏連殳の到達した結果である。このようなこどもの系譜は、作品の中でのこどもと改革者との関係を、そして、魏連殳の希望から絶望への過程を、そして、魯迅の進化論の破綻の過程をもあらわしている。

魯迅は辛亥革命後、苦渋を味わい、「砂漠」の中を彷徨い、「寂寞」を経験し、そして、自分は「英雄」ではないと自己認識する⁽⁴⁾。この自己認識を魯迅が抱いていた進化論に取り入れ、自分自身を絶望的な中国の進化の進行の中に置く。自分自身は「天才、英雄」ではなく、進化の流れの中の一人に過ぎない。進化の進行のためには、旧体制の中で育った古い自分を犠牲にして、やがて消え去っていかなければならない。であれば、自分の任務は何か。「自己背着因袭的重担，肩住了黑暗的闸门，放他们到宽阔光明的地方去；此后幸福的度日，合理的做人。」⁽⁵⁾ということになる。また、自分の心の中に古い思想があるので、自分の文章が青年に悪い影響を与えないかと各所でしきりに心配する。この魯迅流進化論は、『孤独者』の魏連殳が語り、破綻していく進化論と同じである。

進化論の破綻と辛亥革命後の挫折、絶望、苦悩において、魏連殳と魯迅とは確かに共通している。よって、魏連殳には、魯迅の面があることは言えるが、だからといって、両者を結びつけて、魏連殳は魯迅と決めつけるのは早計である。他の面をも検討する必要がある。この小論は、魏連殳の苦悩の姿を追究し、魏連殳がなにものであるかを捉えることにより、作者魯迅の意図に迫ろうとするものである。そして、魯迅が覚醒した知識人として、文学者として、中国の暗黒の状況にどのように対処

しようとしたかを考えようとするものである。

二 知識人の系譜

『呐喊』、『彷徨』には、民衆が登場する作品も多いが、知識人も多い。そこで、これらの知識人の人物を型別に分類して、他の知識人の登場人物と比較することにより、『孤独者』の主人公、魏連受像に迫りたい。

『呐喊』では、十四篇中、知識人(読書人)の生き方の問題として知識人を取り上げているのは、五篇である。『彷徨』では、さらに増えて、十一篇中、七篇である。ただし、『示衆』は、引き回される人がどんな人物かはっきりしないので除外する。

『呐喊』や『彷徨』の、知識人である主人公の分類については、尾上兼英氏によって既に言及されている。尾上兼英氏は、知識階級に属する人を主人公にした作品が半ばを占めていているとして、埋没していく読書人(第一種)、かつては進歩派だった知識人(第二種)、今もなお変革を模索する知識人(第三種)と、三種類に分けている⁽⁶⁾。そして、東北大学の文史哲研究会では、『彷徨』の『幸福的家庭』の「彼」、『伤逝』の涓生、子君は、第二種や第三種とは別ととらえている⁽⁷⁾。そこで、これを第四種とする。そして、筆者の方で追加、補正し、種類ごとに発表順に書き分けると次のようになる。A印は『呐喊』、B印は『彷徨』の作品、人物である。

第一種 A『孔乙己』の孔乙己、A『白光』の陳士誠。

第二種 A『头发的故事』のN氏、A『端午节』の方玄緯、B『肥皂』の四銘、B『高老夫子』の高幹亭。

第三種 A『狂人日記』の狂人、B『在酒楼上』の呂緯甫、B『长明灯』の気違い(四爺の息子)、B『孤独者』の魏連受。

第四種 B『幸福的家庭』の「彼」、B『伤逝』の涓生、子君。

第一種は、『孔乙己』の孔乙己、『白光』の陳士誠で、没落する古い時代の知識人(読書人)で、どうしても科挙の試験に合格せず、乞食をするほどに落ちぶれて盗みを働くようになったり、幻聴を聞き白光を求めてさまよったりして惨めな死に方をする、人生の失敗者である。

第二種は、『肥皂』の四銘、『高老夫子』の高幹亭で、かつては進歩派であったが、革命が挫折すると、たちまち保守的になり保身に走る。『端午节』の方玄綽は、尾上兼英氏は、二種と三種の中間に入れたが、「差不多」を口癖にし適当に物事をあしらって自分のペースや生活を守る保身的な人物で、とても三種とは言えず二種とした。また、『呐喊』の『头发的故事』のN氏が抜けている。N氏は、留学もし、革命にも参加したことのある進歩派だったが、今は、その革命で死んだ青年たちのことは忘れ去られている現状を踏まえ、理想を掲げる「私」を冷やかに批判する。よって、第二種に入れた。

第三種は、『在酒楼上』の呂緯甫、『孤独者』の魏連殳で、第二種と同じ経歴だが、なおも苦悩しながら何とか誠実に生き延びようとする。『狂人日記』の狂人や『长明灯』の気違い(四爺の息子)は、知識人(読書人)かどうかははっきりしないが、旧社会が非人間的であるという点に覚醒し、人が人を食うようなことは悔い改めよ、迷信の象徴の社廟の常夜灯を消せと警告する。よって、第三種に入れた。これらの変革の主張を呂緯甫や魏連殳が受け継いでいくことになる。この流れについては、次章で述べる。

第四種の『幸福的家庭』の「彼」、『伤逝』の涓生、子君は、理想を追い求めようとするが、結局、旧社会の現実が立ちはだかることになる。

第二種と第三種との違いは微妙である。どのように違うかということ、改革の意志があるかどうか、転向したかどうかの違いである。N氏は、反動側にはついてはいないが、改革の意志は消えうせている。方玄綽も、小市民で、胡適の『尝试集』を読む程度であるが、改革の意志は全くない。四銘も、「解放」「自由」に反対し、改革の意志はない。高幹亭は、『中国国粹义务论』という反動の理論の書物を著しており、思想家として旧体制についている。よって、これらの四人を第二種とした。『在酒楼上』の呂緯甫は、最後のところで、一分先のことはわからないと、転向する可能性を否定してはいない。だが、呂緯甫は作品の中では転向するまでに至ってはいない。また、呂緯甫は魏連殳に発展する(この点は次章で述べる)。その魏連殳は、最後は偽装転向をして軍隊の幕

僚になるが、その魂は依然として死んでいず、転向した体を抹殺して自分を始末する。こうして魏連受は、旧社会の登場人物、旧社会を否定するという姿勢を貫く。この点で第二種とは異なる。

魯迅は、このように様々な知識人の姿を作品の中に形象した。孔乙己、陳士誠は、変革を受け付けられない社会の中で埋没していく読書人、『伤逝』の涓生、子君も古い社会習慣に敗北していく人物と捉えれば、『幸福的家庭』の「彼」以外は皆、変革で括ることができる。つまり、魯迅には知識人はどのように生きるべきかという知識人問題があった。辛亥革命後、当時の進歩派は、魯迅の言うように、分裂し⁽⁸⁾、生き方の上で苦悩しており、生き方を示す必要があり、また、変革のためには知識人の力が必要であったので、多様な知識人群像を描いたのである。このように、自分以外の、現実社会の人物を描き問題提示をすることは、覚醒した知識人の務め、文学者としての務めであった。そうした切実な思いは、前述したように、知識人に関する作品が、『彷徨』になると十一篇中七篇と過半数を越えるようになることからわかる。そして、これらの知識人群像の一人が魏連受であり、他の作品の人物と同じく基本的には当時の知識人を描いたものである。

三 黒の系譜

第三種は変革者たちである。だが、『狂人日記』の狂人、『長明灯』の気違い(四爺の息子)と、『在酒楼上』の呂緯甫、『孤独者』の魏連受とはかなり異なる。狂人と気違いは、旧社会に組み込まれてしまった民衆に警告を発するが、強靱な旧社会は、彼らにまともな姿でいることを許さず、狂人や気違いの姿に追いつめ、さらに狂人や気違いであることも許さない。こうして、変革者は敗北していく。そして、その敗北者は、『在酒楼上』の呂緯甫や『孤独者』の魏連受の姿となって再び現れる。

『孤独者』の魏連受は、『在酒楼上』の呂緯甫の発展した人物であると、既に竹内好氏は指摘している。「『魏連受』は『酒楼にて』の『呂緯甫』の発展であろうと思われるが、ここでは独白の語り手ではなく行動者であり、『私』も単なるきき役から、行動のあらわれる場の設定者

に変化している。」と⁽⁹⁾。両作品とも「私」を登場させ、主人公の話
を聞く役割や進行の役割を果たさせるが、『孤独者』の方がより発展し
た形になっていると竹内氏は指摘している。さらに、地名についても、
『酒楼にて』の主人公が遍歴した地名と『孤独者』の『私』が遍歴した
地名とが一致していると指摘している⁽⁹⁾。

「私」の登場、その「私」が主人公の話の聞き役、進行役になっている
こと、地名の一致、そして、その他に、呂緯甫と魏連殳との、顔の様
子がほぼ一致していることも指摘できる。呂緯甫は、青白い面長の角張
った顔、ボウボウとのぼした髪やひげ、濃い黒々した眉の持ち主で、魏
連殳は、面長の顔、ボウボウに伸びた髪、真っ黒なひげ、濃い眉で、顔
の形、ボウボウの髪、ひげや濃い眉について呂緯甫と同じである。つま
り、顔の様子については同じであることは、人物も同じであることにな
る。そして、眼は黒い生地の中から光っており、人を射るような光を出
して見つめる点は、呂緯甫の学生時代とおなじである。それから、呂緯
甫、魏連殳ともタバコ好きである。呂緯甫が酒楼で「私」と話をしてい
る時、ずっとタバコを吸い続けている。魏連殳もまた、「私」が魏連殳
を訪問した時、やはりタバコを吸い続けている。ちなみに、『两地書』
の中で、魯迅は許広平から酒とタバコをたしなめられている⁽¹⁰⁾。という
ことは、魯迅も、呂緯甫、魏連殳と同じようにタバコをよく吸うという
ことである。

経歴についても同じである。本稿二頁に魏連殳の経歴を、三頁に呂緯
甫の経歴を述べたが、両者とも革命を志し、挫折し、社会から迫害を受
け、生活していくことができず、苦境に陥る。こうした経歴は共通して
いる。以上の点から、魏連殳は呂緯甫の発展した人物と見ることができ
る。

『在酒楼上』の作品は『孤独者』とは異なり、小説が途中で終わって
いる。が、このままで終わることは、なんの出口も方向性も見つけられ
ずに終わることで、敗北を意味する。今までの様々な試みも無意味で、
暗黒と虚無だけが実在であったことになる。

『在酒楼上』は、一九二四年二月十六日の作である。同年の九月二十
四日の作に『野草』の『影的告别』がある。この散文詩もまた、黒の

「影」を登場させている。「影」は、本体の「君」と別れて、「君」もいず他の影もいず、完全に自分だけの世界になる暗黒の無地に彷徨いたいが、結局明暗の間に彷徨うことになる。この彷徨いは、他の『野草』の諸作品にも見られる。『过客』の「过客」と「老人」、『墓碣文』の「私」と「墓碑」との分裂、『死火』から『死后』までの連続七作の、「私」と「夢の世界の自分」との対峙であり、この彷徨い、分裂、対峙は、そのまま当時の魯迅の分裂、彷徨をあらわしている。そして、『野草』の中に『过客』（一九二五年三月二日の作）という詩がある。時の設定は、『影的告别』で「影」が嫌った黄昏時で、黒いひげ、乱れた髪、ぼろぼろの黒の短衣とズボンと、黒ずくめの过客は、呂緯甫や魏連殳の様相とそっくりである。疲れはてた过客は、この先がどんな所か聞かすが、白いひげ、白い髪、黒い長衣の老人は墓だと言う。が、黒い髪、黒い瞳、白地に黒の格子縞の長衣の娘はきれいな花が咲いていると言う。老人は戻ることを勧めるが、过客はどこへ引き返しても希望の見える世界ではないと断り、暗い夜が背後から迫るなか先の方の声に従って一人で前に進もうとする。『死火』（一九二五年四月二十三日の作）から連続七作の、その最後の作品、『死后』（同年七月十二日の作）の最後のところで、「私」は遂に起き上がる⁽¹¹⁾。

『在酒楼上』の呂緯甫は、出口もなく、希望もないままに終わる。そして、「影」となって黎明か黄昏かわからないまま彷徨し、「过客」となってやみくもに前進する。『两地书』『第一集』『二』にあるように、敵のためには自分の死体さえ渡さない魯迅である⁽¹²⁾。どうするか。過去や古い世界に舞い戻ることはしない。自分も否定するが、敵をも否定するために、自ら身を反転して偽装転向して敵側の陣地深く入っていく、それが魏連殳であると思う。ただし、第二種の知識人グループとは違う形で。つまり、身は売ってもあくまでも魂だけは売らずに。

しかし、失敗者は失敗者で、しかも完全な失敗者である。魯迅としては、この『孤独者』を描きあげることで、魏連殳的人物やその生き方と訣別できたという点はある。しかし、敵は依然として健在である。敵に打撃を与えなければならない。先程述べたように、呂緯甫、魏連殳にしても、髪、顔のひげや眉は黒色で、魏連殳は顔がますます黒くなってい

く⁽¹³⁾。この黒は、『故事新編』の『铸剑』(一九二六年十月作)の「黒い人」につながっていく。黒いひげ、黒い眼の黒い男が、何もかも知っているということで突如として主人公の若者、眉間尺の前に現れ、父の遺言で父の仇、国王を討とうとする眉間尺の首と青剣を持って国王の前に行き、魯迅の筆名である「宴之敖者」⁽¹⁴⁾と名乗り、うまく王の首を鼎の中に落とし入れ、若者がやられそうになるのを見て、自らの首を鼎の中に落として、王の首に噛みつく。さすがの王もだんだん弱り遂に死ぬ。強力でしぶとい敵をやっと打倒することができたのである。

つまり、目覚めはじめていた狂人、気違いが姿を消された後、敗北者の姿として、呂緯甫、「影」、「過客」、魏連殳、それから、「黒い男」と、言わば黒の系譜としてつながり、そして、やっと敵の打倒が、作品の中ではあるが、成ったのである。

四 魏連殳の解釈をめぐる

永井英美氏の『魯迅《孤独者》論』⁽¹⁵⁾の注(1)において、『孤独者』についての日本、中国の論文を整理し、魏連殳と魯迅の関係、即ち、魏連殳は魯迅なのかどうかという点で分けをしている。そして、「日本側の批評では、魏連殳には魯迅その人の影が濃厚に現れているとするものがほとんどである。」として論文を紹介している。そして、「中国側の論文は、魏連殳と作者の境遇の共通点に、作者自身の影を読み取りつつも、魏連殳の『墮落』に対しては、次のように強い否定・批判を行うものが多い。」として、これも多くの論文を紹介している。

魏連殳の最後の行動の箇所は、重要な意味を持ち、この作品における頂点である。最後の行動とは、即ち、魏連殳が旧勢力から攻撃され仕事を奪われ、生きていくために軍の幕僚となり、今まで主張してきたことをしりぞけ、反対してきたことを採用し、あたかも自分の命を縮めるようにして自分を抹殺していった行動である。この行動についてどのように見るかは、魏連殳をどのように見るかに関わりがある。永井秀美氏の紹介する日本の研究者⁽¹⁶⁾は、ほとんどは、復讐か報復の行動と捉え、魏連殳は魯迅の影が濃いと見る。一方、中国の研究者の多くは、「私」を魯迅と捉え、「私」と対置する魏連殳の最後の行動を復讐と捉え、その

復讐は間違っていると痛烈に批判する⁽¹⁷⁾。どちらにしても、多くは最後の行動を、復讐あるいは報復ととっている。筆者は、復讐、報復という捉え方は適切ではないとは言わないが、より適切には、旧社会に属する登場人物たちはもちろん、魏連受自身、そして、出口を見つけることができない「私」をも否定する、言わば全否定と捉えるべきであると考ええる。

まず、言われるところの復讐(報復)の内容を具体的に挙げてみると、旧社会に対する嘲笑・冷笑、遺族たちのエゴイズムへの復讐、多くの人物の醜い姿の暴露、多数の人々の破壊、反動の紳士たちにおもねさせ、家主をからかい、こどもに犬のなきまねをさせ、頭を床にぶつけさせることである。復讐とは、過去に被害を被ったことに対してしかえしをすることである。新聞紙上で匿名で攻撃をし、学会で流言を流し、勤め先の学校を首にした者たちに対しては恨みがあり、復讐も考えられようが、祖母の遺族、家主、こどもたちに対しては、はたして復讐ということばを使うほどの恨みがあるのだろうか。

また、しかえしをするといっても、自分の偽装転向の正体が見破られないようにしなければならないという制約はあり、自虐的形を通してという制約もあるが、だまして自分を褒めたたえる文章を書かせ、お世辞を言わせ、這いつくばわすことは、しかえしと言えそうではあるが、アリツィバーシェフのセヴィリヨフ⁽¹⁸⁾の無差別殺人や『铸剑』の「黒い人」が国王をやっつけることと比較すればそれほどのことはない。また、旧社会への嘲笑や冷笑、多くの人物の醜い姿を魏連受の一人芝居により暴き出すことは、復讐というより、嘲弄や否定に近いのではないだろうか。この点は勝利とは言える。敵、旧社会の中に堂々と入り込み、敵を従え、敵を足元にひれ伏させ、敵、旧社会の愚劣な実態を明らかにできたのだから。

それから、復讐(報復)というのは、相手が復讐されたという意識や具体的な被害があってこそ、復讐が成り立つ。が、紳士たち、こどもたち、民衆は全く被害を感じていないし、被害を受けていない。魏連受が転向して何かをしたと思っても、何も変わらず、全くの一人芝居である。変わったのは、ただひとつ、棺桶の中の魏連受の姿、即ち、軍服の

ズボン、軍服の上着、軍靴、軍刀、軍帽の姿だけである。なにも変わらなかったことは、魏連殳自身もわかっている。「私」が最後の別れの時見た魏連殳は、あたかも自分のぶざまな屍体を冷やかに笑っているようであったから。

紙幅の都合で詳述は避けるが、作品の中の登場人物、事件、発行物は現実の人、ものと対応している。魏連殳に生き続けてほしいと希望し、敵に殺された魏連殳の師は、『朝花夕拾』の『范愛農』で述べられる、『狂人日記』にも登場する革命家、徐錫麟⁽¹⁹⁾、魏連殳の部屋によく遊びに来る若者たちは、郁達夫の『沉沦』をよく読む、革命にはつきものの余計者たち、「挑剔学潮」と非難される事件是北京女子師範大学の事件、学校騒動を煽動している数人とは、魯迅が起草した『对于北京女子师范大学风潮宣言』⁽²⁰⁾に署名した魯迅他六名の人たち⁽²¹⁾、「私」を攻撃した《学理周报》の紳士たちや、転向した魏連殳をほめまくる《学理七日报》の人々は、陳源氏のグループ、現代評論派、《学理周报》や《学理七日报》は、《現代评论》であることが考えられる。「私」への、給料の不払いの事件⁽²²⁾も、実際の事件としてある。そして、『孤独者』の作品が成った十月の前、九月二十一日に、北京女子師範大学は解散を強行され、他の場所で学校を維持運営しようとする事態になっている。つまり、この作品は、作品の中に現実の敵や事件を取り込み、また、作品の外でも現実に敵と闘っており、魯迅は執筆当時、現実と張り詰めた緊張関係にあると言える。このような現実との緊張関係を考えると、転向し、敵の軍門に下り、民衆に復讐する変革者、魏連殳が魯迅であるかわかるのは、まずいことではないか。

復讐の説の根拠は、『工人绥惠略夫』の選択、訳業、後記、発表、出版などの一連のこと⁽¹⁸⁾、並びに、『两地书』『四』での労働者セヴィリヨフについての記述⁽¹⁸⁾、『野草』の『复仇』、『复仇(其二)』の詩のタイトルとその内容、高长虹の裏切りに対する魯迅の憤慨⁽²³⁾などである。確かにそれらの復讐という意識の流れの中に、『孤独者』の執筆時は居たと思うし、復讐の意識の流れは否定しない。が、だからといって、その流れでもって復讐であると限定するのはどうか。この作品の捉え方として、筆者は、復讐と言うよりも、全的否定と捉えた方がより適切であ

ると考える。復讐説は、以上見てきたように、その具体的内容、対象、規模、被害者意識、その一人芝居の点や現実との緊張関係からして弱いと思う。そして、復讐となると、魏連殳、即ち、魯迅が旧社会に対してやり返すという一方的行為にのみ重点が置かれ、強調され、そこでよしとし、言い終わってしまい、復讐の他のこと、自分自身の否定のことや作品のテーマが同時に捉えられない、あるいは、強調されなくなる。こうして、復讐説と、魏連殳即ち魯迅説は結びつく。このようではなく、つまり、旧社会から攻撃され、それを又やり返して復讐するといった次元ではなく、また、自虐の形を取ったというあいまいな捉え方をするのではなく、旧社会も魏連殳も否定する全的否定と捉えるという高い次元へ進むべきである。それでなければ、この作品の創作の意図、全ての否定の上に新しい中国を模索するという意図がはっきりと見えてこない。

労働者セヴィリヨフについての記述がある『記谈话』（最初の発表は一九二六年八月）では、セヴィリヨフのような破壊者、復讐者は中国には居ないし、居てほしくないと述べている⁽²⁴⁾。その文章の趣旨から言えば、セヴィリヨフと魏連殳とは違うと言うかもしれないが、魏連殳についても同様のことが言えるのではないか。また、魏連殳の「私」への最後の手紙の中で、「我自己也觉得不配活下去；别人呢？也不配的。」⁽²⁵⁾と、自分も含めて誰も生きる資格はないと言う。また、「私」が死んだ魏連殳と対面した時、「一切是死一般静，死的人和活的人。」⁽²⁶⁾と二回繰り返されている。一切が、死んだ人も、生きている人も、皆死のように静かであったと言う。筆者は、これらの叙述を重視する。誰も生きる資格はなく、死んだ人も生きている人も死んでいるかのような、ということは全的否定を意味している。全的否定とは、結局出口を見つけないことができなかった「私」を含めて魏連殳その他の登場人物全員の否定であり、誰一人として肯定される人物はいないとの意味である。こうした中国の暗黒という現実の問題は魯迅の常に悩んでいるテーマであり、何も珍しいことではない。全的否定をして、そうして、魯迅の文章に頻出する「荒野」、「砂漠」即ち魯迅の原点に又舞い戻るのである。中井政喜氏の論文には旧社会の否定とともに魏連殳をも否定する記述が見られる⁽²⁷⁾が、こうした方向をもっと追究すべきであると思う。

復讐説は不適切とは言えないが、より適切な捉え方とは言えない。であるから、この復讐は倒錯しまちがっているという見方が出てくる。もし、そうした見方であるならば、魏連受を魯迅と捉えるのは、魯迅を否定的に見ることになってしまう。倒錯しまちがっている見方よりもっときびしい見方もある。それは、永井英美氏がこの章の冒頭で触れた中国側の研究者の主要な見方で、魯迅である「私」に対置された魏連受を、墮落した、個人主義的知識人として捉え、徹底して魏連受を批判する。つまり、復讐は誤りという説と「私」即ち魯迅説が組み合わせられる。しかし、その作品の登場人物を捉える姿勢には問題として考えさせられるものがある。つまり、魏連受を文学創作上の人物ではなく、現実の、あるいは歴史上の人物として捉え批判する姿勢、あるいは、転向するようなことは文化面の偉大な指導者、魯迅にはありえないことと考える姿勢、あるいは民衆を不可侵とする姿勢、あるいは、自分の思想を強く押し出しその枠組みで捉え、自分の思想の堅固なことを示す姿勢である。

この章の冒頭で紹介した永井秀美氏は、「連受は魯迅その人か、あるいは『私』が魯迅なのか、などにこだわることは、とりもなおさずこの作品のもつ可能性を狭い範囲に閉じ込めてしまうことになる。」⁽²⁸⁾と述べる。ではどういうことか、魏連受とは何者なのか、具体的にはここには記載されていない。

五 魔的なものの系譜

『孤独者』の作品の中で「私」が指摘するように、魏連受は祖母と同じように自分で孤独を作り出し、その孤独の中に住み、社会を悪く見る。人に対しては、沈黙が多く、冷やかな態度を作品の中で七回も見せる。自分に生きることを希望した人が死んだ後、主張した一切を撤回し、反対した一切を実行し転向していく意志力・行動力の強さ、敵側の陣の中で堂々と振舞う豪胆さ、一切何も残さず自分を抹殺していく徹底した自虐、全てを否定しさっていく徹底ぶり、いずれも尋常ではない、鬼気せまる、悪魔のような、超人ではないが、それに近い人物である。

魏連受ではないが、魯迅の他の作品の中にも魔的なものはたくさん見られる。『野草』の『復仇(其二)』では、十字架にかけられた神の子、

その人を礎にする人々、行人の描出。『过客』では、尋常ならざる意志力をもって足をひきずりながら前へ進む過客の描出、施しをする人の滅亡を直接目で見るか、その人以外の全てのものの滅亡を願う過客の描出。『墓碣文』での、墓碑に書かれた屍体の主の描出。『这样的战士』での、無物の陣に、誘惑に屈せず、戦いの意志を貫き、どこまでも戦い抜く戦士の描出。『写在《坟》后面』では、梟蛇鬼怪といえども真の友と言う。李秉中への手紙の中で、自分の中に毒気と鬼気があり、除こうと思うが除けないと書いている⁽²⁹⁾。そして、こうした魔的なものが、自分の文章を読んだ青年に伝染しないかとしきりに心配する。

作品だけでなく、魯迅の若い時の考え方にも魔的なものは見られる。一九〇七年の『文化偏至論』では、愚かな民衆に失望し、天才の出現に期待している。また、『摩罗诗力说』では、国民精神の発揚のために新しい声が望まれ、人々より反発を受けても、新しい声をあげ続けた摩羅詩派の人々を顕彰し、中国においても超人の出現を期待する。魯迅は自分は英雄ではないと言うが、天才、超人、英雄に期待し切望する所に魯迅には、超人、魔的なものの資質がある。そして、誰も超人の力を発揮しないのであれば、覚醒者、魯迅が超人、魔的なものになっていくしかない。こうした魯迅の側面、もうひとりの魯迅が、前出の『野草』の『复仇(其二)』、『过客』、『墓碣文』、『这样的战士』などの人物像としてあらわれたのであるし、また、『孤独者』の魏連殳像としてあらわれたのであると思う。魔的なものには、魔的なエネルギーがある。魯迅は、民衆を思う気持ちの裏に、尋常ならざる、人並みはずれた、魔的なエネルギーがあったればこそ、魯迅は、いろいろな事態、変化に対応できたのであり、常に文学面、文化面の最前線に立つことができたのである。たちまち人を愛し、たちまち人を憎む体質⁽³⁰⁾は、魯迅には民衆を思う気持ちと魔的なもの、エネルギーとの共存の証明になる。

第一章では、辛亥革命後の挫折、苦悩、絶望と進化論の破綻について、魏連殳と魯迅とは共通しており、この点で魏連殳と魯迅は重なること。第二章では、暗黒の中国社会を変革したいという強い意識の下で、覚醒した知識人の務めとして、知識人はどう生きたらよいかという知識人問題の提示のため、多様な知識人群像を描き、その一人が魏連殳であ

ること。第三章では、革命後、挫折し、絶望し、彷徨い、が、過去や古い世界に舞い戻ることはせず、自ら身を反転し偽装転向し、敵側の陣地深く入り、自分も否定するが、敵をも否定する、一知識人の生き方、死に方を魏連受に凝縮し描いたこと。第四章では、復讐説と、魏連受は即ち魯迅である説との組み合わせが日本で、復讐は誤りという説と、「私」は即ち魯迅である説との組み合わせが中国で、それぞれに有力な説であり、双方とも復讐と捉えることは同じであり、もっと高次元に、魏連受を旧社会も旧社会に組みする人々も魏連受自身も「私」も否定する全的否定者として捉えるべきであること。この章では魏連受には魔的なもの、魔的なエネルギーが潜んでいること。以上が述べてきたことである。さらに、魏連受は誰であるか限定し決めつけるのではなく、多面的な姿があると筆者は考える。

つまり、魏連受には、辛亥革命後の魯迅の姿、変革を目指し、挫折した知識人の姿、旧社会、旧社会に属する人々だけでなく「私」、魏連受をも否定する全的否定者の姿、そして、魔的なもの、魔的なエネルギーを持った姿と多面的な姿がある。どの姿を取り上げるかで誰であるかは変わるわけであるから、魏連受は魯迅である、でないとか、「私」は魯迅である、でないとかの論議は、分析の上では必要であろうが、慎重にすべきである。また、そういう捉え方は、却って、魏連受の捉え方、作品の捉え方を狭くし、ひいては魯迅を小さくしてしまう。では、魏連受と「私」の関係は何か。両者は変革者であることは同じだが、独立した人格を持ち、独自に行動する。両者は、互いに手紙をやり取りし、訪問し訪問を受け、互いに気にし合い、互いに見つめ合い、互いに意見を言い合い、互いに批判している。よって、魏連受は誰で、「私」は誰でとは捉えず、両者を切り離さず合わせて捉えるべきで、二人で一人、即ち、一対と捉えるべきであると思う。魯迅の眼は、魏連受の眼にもなり、また魏連受を冷ややかに見つめる「私」の眼にもなり、また、「私」を見つめる魏連受の眼にもなり、また、魯迅自身を見つめる眼にもなる。そういう点では、魏連受と「私」と魯迅とは三者互いに見つめ合っている。また、作品の外から見つめる敵の眼もあり、それを睨む魯迅の眼もある。作品の最後のところで「私」は転向した魏連受のぶざま

な屍を見て、魏連受、魏連受的な生き方とは離れていく。しかし、『在酒楼上』の呂緯甫が自己不信に陥って転向する可能性を漏らしていたように、「私」も旧陣営、旧社会に追いつめられて、出口が見つからず、魏連受と同様にいつ転向するかも知れない。そして、当時の知識人も、魏連受程には極端でなくても第二種の知識人と同じ運命をたどることは充分ありうる。つまり、魏連受、「私」、呂緯甫と当時の知識人とは根本的には同じで、同じ運命になるかもしれない。「私」や呂緯甫は魏連受になりうるし、当時の知識人も魏連受になりうる。であるから、限定すべきではない。

「砂漠」の中で国民精神の変革を目指して彷徨している魯迅は、魔的なものをエネルギーにして、転向という致命的な行動により変革者側から敵側に潜入し、命と屈辱と失敗の引換えに全ての否定を勝ち取り、自らを始末するかのよう孤独に死んでいく人物を形象した。覚醒した知識人の責務として、文学者として、辛亥革命の蹉跌を繰り返さないため、真の中国再生のために、全的否定をし、真の闇を提示して、また、知識人に転向という惨めさを示し生き方を問い、中国の様々な人物を配置した全体像を提示した。魯迅としては、長い間培ってきた魏連受を形象化でき、魏連受や魏連受的生き方と別れることができ、また、小説の中では初めて魔的な自分を対象化でき、今までの総まとめの作品を描き終わり、一つの区切りとなった。〔この小論は筆者の修士論文の中の一部を書き直したもので、また、注釈の引用文は紙幅の都合上全て割愛した。〕

〔 注 〕

- (1) 一九八一年版『魯迅全集』第四卷『南腔北調集』『《自选集》自序』四五五頁。以下、一九八一年版『魯迅全集』を基本文献とする。
- (2) 『魯迅全集』第一卷『呐喊』『自序』四一八頁。
- (3) 『魯迅全集』第一卷『呐喊』『自序』四一九頁。
- (4) 『魯迅全集』第一卷『呐喊』『自序』四一七頁。
『魯迅全集』第一卷『墳』『写在「墳」后面』二八二頁、二八四頁。
- (5) 『魯迅全集』第一卷『墳』『我们现在怎样做父亲』一三〇頁、一四〇頁。

- (6) 『魯迅私論』『魯迅の小説における知識人』三四、三五頁(汲古書院、一九八八年)。
- (7) 東北大学文学部中国文史哲研究会『集刊東洋学』第十六 共同研究『《彷徨》について』一一八頁(一九六六年)。
- (8) 『魯迅全集』第四卷『南腔北調集』『《自选集》自序』四五六頁。
- (9) 『世界文学はんどぶつく』『魯迅』一七八頁、一八〇頁、一八一頁(世界評論社、一九四八年)。
- (10) 『魯迅全集』第十一卷『两地書』『第一集』『二三』七七頁。
- (11) 『魯迅全集』第二卷『野草』『死后』二一三頁。
- (12) 『魯迅全集』第十一卷『两地書』『第一集』『二』一五頁(一九二五年三月十一日)。
- (13) 『魯迅全集』第二卷『彷徨』『孤独者』『一』八八頁。『二』九一頁。『三』九五頁。
- (14) 『魯迅全集』第二卷『故事新編』『铸劍』注釈十三(四三七頁)には、宴之敖者は魯迅の筆名とある。
- (15) 『野草』第五十九号(中国文芸研究会、一九九七年二月一日発行)九五頁。
- (16) 復讐説をとり、魏連受は魯迅の影が濃いとする論文は、宮田成生氏の『《孤独者》を読んで』(『熱風』二号『魯迅を読む会』、一九七一年)、中井政喜氏の『魯迅《孤独者》覚え書』(『名古屋大学中国語学文学論文集』三、一九七九年)、丸尾常喜氏の『魯迅一花のため腐草となる』(集英社、一九八五年)、尾上兼英氏の『《孤独者》私論』(汲古書院、一九八八年)である。他、片山智行氏の『魯迅のリアリズム』『第三部 作品の世界』『第二章 《彷徨》論』(三一書房、一九八五年)も同様である。竹内好氏については、その著、未来社版『魯迅』、世界評論社版『魯迅』や岩波書店『魯迅選集』第二卷『解説』には、「復讐」や「報復」ということばは見られないが、魏連受を魯迅に近いと見る。
- (17) 例として挙げると、茅盾(方璧)氏は、李何林氏編『魯迅研究丛书』『魯迅論』(一九三三年初版、一九八四年陝西人民出版社)で、多くの人物の醜い姿を暴き出す復讐をしたと述べる。李桑牧氏は、『《彷徨》中の几篇描写知识分子的作品』(長江文芸出版社、『魯迅小説論集』、一九五七年)で、「私」が魯迅で魏連受を個人主義的知識人として厳しく批判している。李希凡氏は、『惨伤里夹杂着愤怒和悲哀一论《孤独者》魏连受』(『李希凡文艺论著选编(一)』、春秋出版社、一九八八年)で、復讐という間違った方法をとる魏連受を魯迅はプチブル知識人として強く批判していると述べ

る。余渉氏は、『魯迅思想飞跃前的一个信号—重读《孤独者》』（浙江魯迅研究学会編『魯迅研究论文集』、浙江文芸出版社、一九八三年）で、魯迅は「私」を通して魏連受の報復の対象とその方法においてまちがっていると批判していると述べる。許欽文氏は、『彷徨分析』（一九五八年。香港文采出版社出版、一九七〇年発行の資料による。）で、余渉氏と同じ復讐の内容を述べている。范伯群氏、曾華鵬氏は、『《骄傲》和《玩世》疗法的末路—论《孤独者》』（『魯迅小说新论』、人民文学出版社、一九八六年）で、旧社会に対する報復は何ら報復とはなっていない、魯迅と比較しながら、魏連受を墮落者として痛烈に批判している。張效民氏は、『魯迅作品赏析大辞典』張效民『孤独者』『析』（四川辞書出版社、一九九二年）で、魏連受を強く批判している。

- (18) 『工人绥惠略夫』の本は、第一次世界大戦戦勝後、上海のドイツの商人の書籍を整理している時、見つける。その訳了は一九二〇年十月、『译了《工人绥惠略夫》之后』は一九二一年四月の執筆、その発表は一九二一年七月から十二月まで、その出版は一九二二年五月。『魯迅全集』第四卷『两地书』『四』に労働者セヴィリヨフについての記述がある。
- (19) 『魯迅全集』第二卷『朝花夕拾』『范爱农』三一〇頁、三一〇頁。
- (20) 『魯迅全集』第八卷『集外集拾遺补編』『对于北京女子师范大学风潮宣言』四二五頁。
- (21) 「马裕藻，沈尹默，李泰棻，钱玄同，沈兼士，周作人」の六人。
- (22) 『魯迅全集』第二卷『彷徨』『孤独者』『四』九八頁。
- (23) 『魯迅全集』第十一卷『两地书』第二集『九十五』に見られる。
- (24) 『魯迅全集』第三卷『华盖集续編』『记谈话』三五七頁。
- (25) 『魯迅全集』第二卷『彷徨』『孤独者』『四』一〇一頁。
- (26) 『魯迅全集』第二卷『彷徨』『孤独者』『五』一〇五頁。
- (27) (16)に紹介した中井政喜氏の『魯迅《孤独者》覚え書』（『名古屋大学中国語学文学論文集』『三』一九七九年）一一〇頁。
- (28) (15)の『野草』第五十九号〈五〉九四頁。
- (29) 『魯迅全集』第十一卷『书信』『到李秉中』（一九二四年九月二十四日）四三一頁。
- (30) 『魯迅全集』第十一卷『两地书』第一集『二十四』七九頁。